

『新・やまと物語』（第5巻）

改訂版

タイトル

第21章 倭国北辺の国々

第22章 しんおうじょう
新王城

第23章 すみのえ
住吉の客人

第24章 はい か
倭王に拝假す

第25章 き こく の ば
帰国を延しての倭国での日々

第26章 とう じ 冬至の祭 しんじょうさい [新嘗祭]

第27章 倭国の文化

新・やまと物語 (5)

こ が けい きく
古 閑 炯 作



画像提供：東海大学情報技術センター



画像提供：東海大学情報技術センター



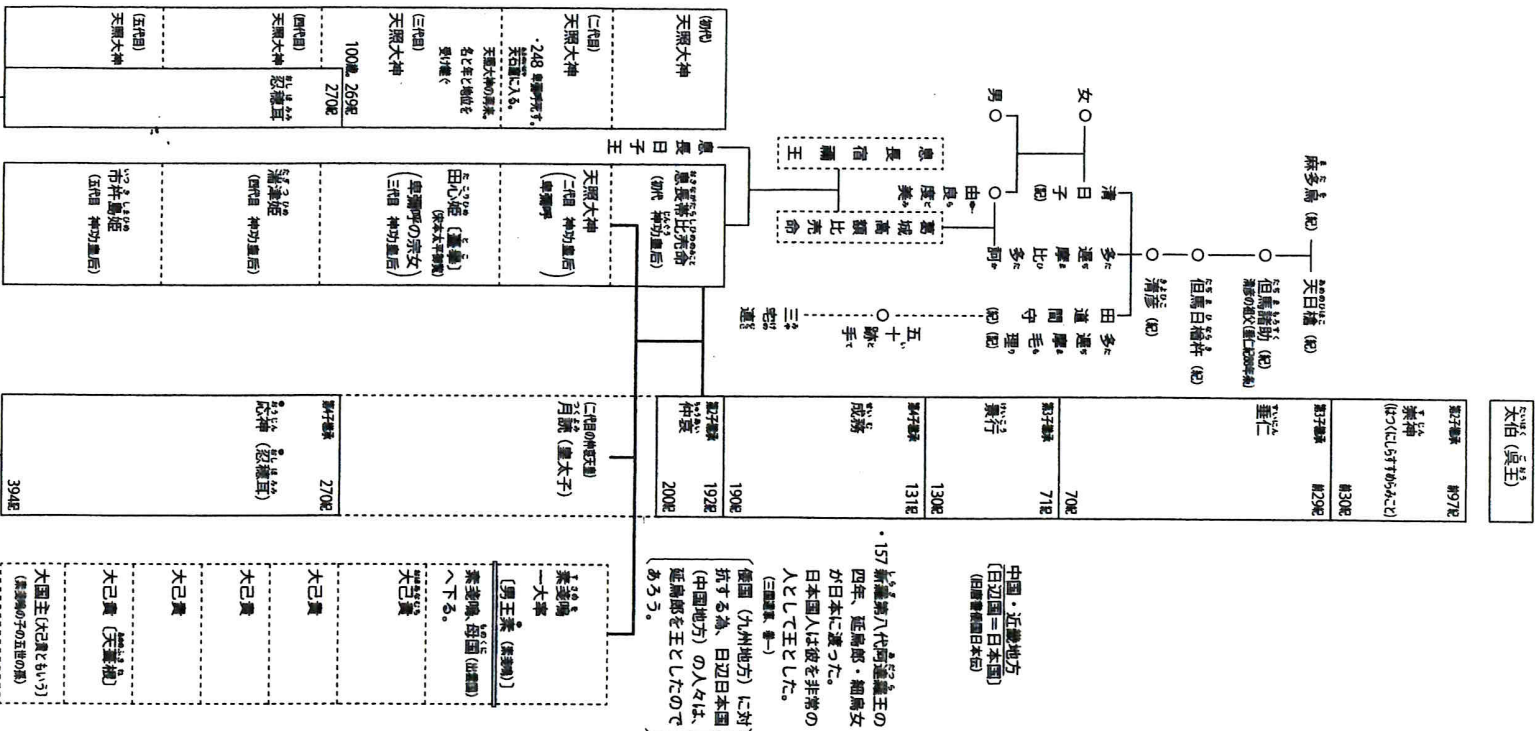
(拡大映像)

〔第1表〕系譜

A3に印刷

万世一系の
思想によって
作られた系譜
(配・梶の系譜)

この物語における系譜



遺彦神命が磐長姫をとりぞけたので、これより以後、天皇帝等の命が短くなつた(記)
つまり、長男(皇女)が継名している限り、同一名を名乗るという古来の風習は、遺彦神命(仁
徳天皇)の時に廃止され、これに替わって、大陸の王位継承法が採用されることになったので
あるうか。
これより後、王位は、複雑に継承されてゆくことになる。

- ・後末
周の天伯は、弟幸雄に位を譲る為、江前にはしり、文身斬髪して君長となり、吳國を建国した。
〔晋人は自ら太伯の後と云う〕と、簡略逸文・
〔晋書・梁書に記されている。
前漢の武帝(在位前141〜前87年)、簡雄王を封ず。〕
*簡雄王は、実父、太伯の末裔だったのでなからうか。
・(前104頃)
太伯の後、簡雄王をあらため、雲梯の景治あたりから九州へ東進開始。
・前97
崇神天皇即位、皇子連の百余人(後の諸國)中の播磨界の地に倭國を建国して王となったが、倭國は、後漢末(220)の版圖でいえば、倭國(北九州・山口地方)の播磨界に位置していたのであるうか。(後漢書倭伝)

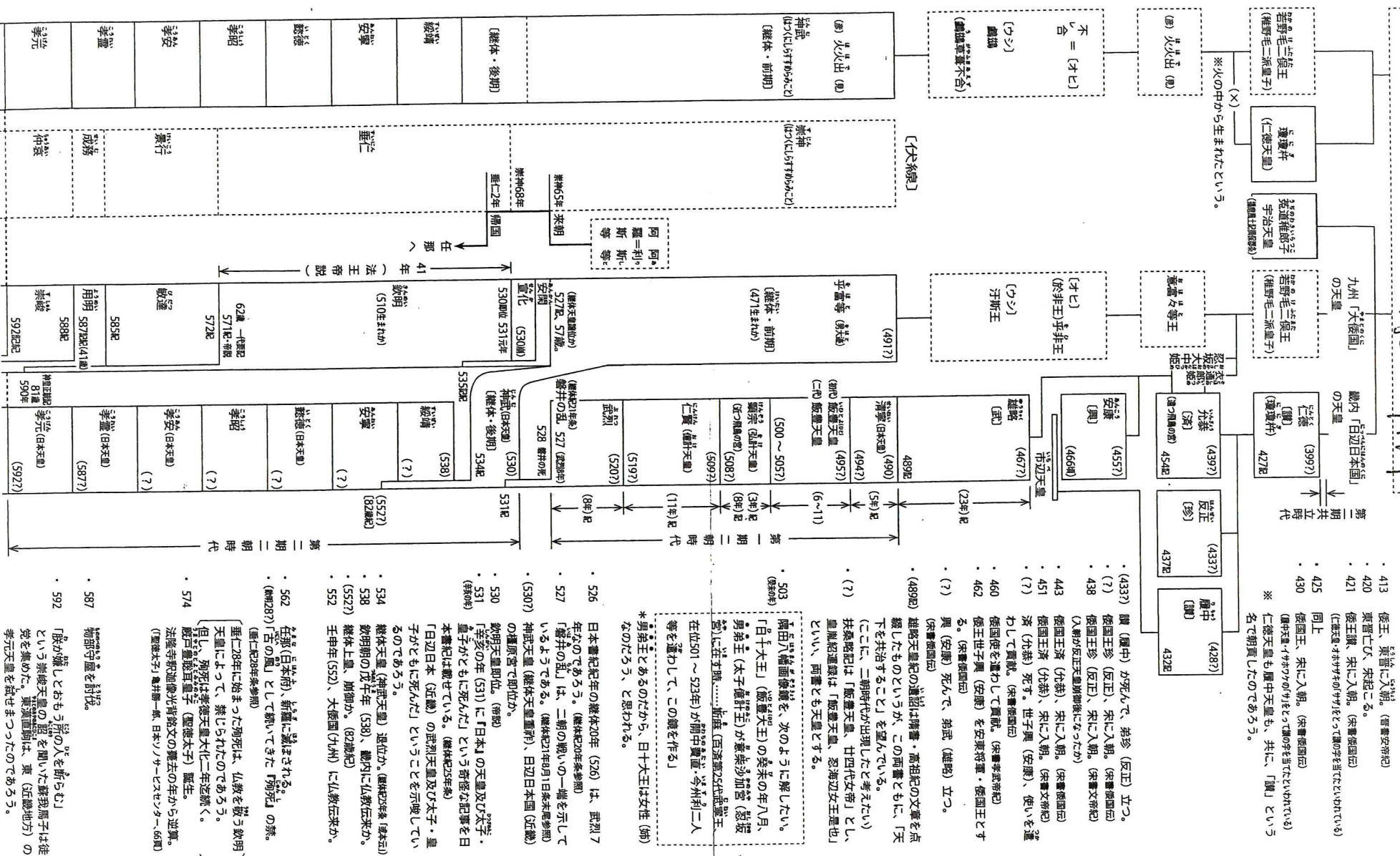
- ・(紀28)
垂仁天皇の同母弟「履彦」が薨じた時、殉死が始まった。(新神紀・垂仁紀)
・57
播磨界の倭國が秦貴朝貢した。(後漢書倭伝)
・61
由道間守を新世國(元の問題のことであるうか)へ遣わす。
・71
襦を持ち帰った由道間守、殉死する。(記・紀)
・107
倭國王帥升は、生口百六十人を獻じ、諸侯を賜った。(後漢書倭伝)

- ・147
植・雲の間、倭國大乱。(後漢書倭伝)
(倭國と皇子國との戦いであつたうか)
倭國が皇子國を奪い取り、北九州・山口地方に三十余國を置いて統治することとなつたように思われる。

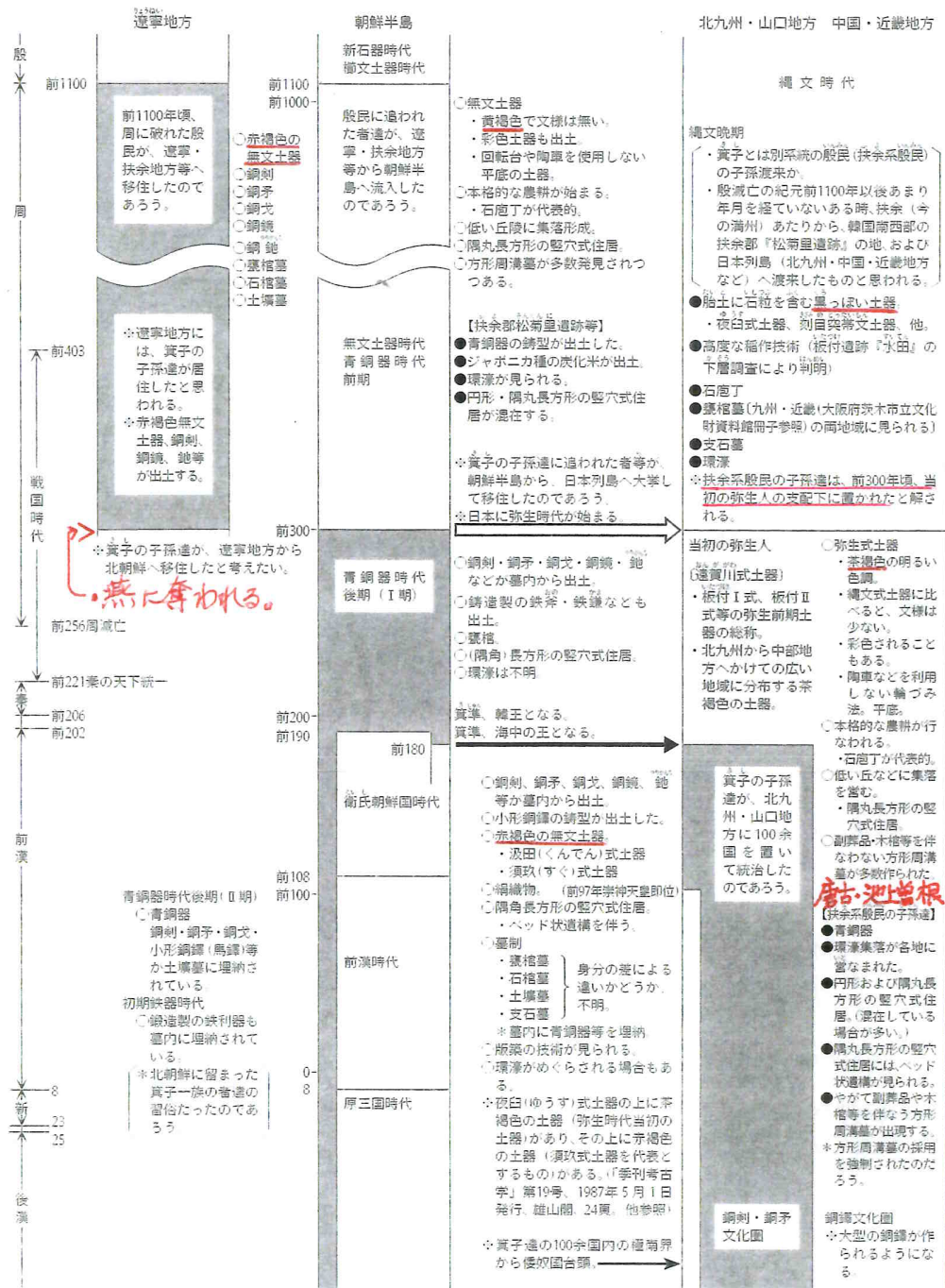
必ず、切斷の線を引いて下さい。
新巻第1巻から転写して下さい。
4エが太変だからです。

- ・188
*北九州・山口地方の小規模な諸國を統一し、神功皇后、朝鮮半島南端の神功國を襲撃、南の倭國のことを「邪馬台國」(八女土国)と呼称するようにになったが、
・(7)
共立(男弟が皇尊をたすけて國を治めた)倭の女王皇尊、羅針米らを迎へ、諸帝に朝貢。(倭書倭人伝)
倭の女王皇尊、倭國、男王皇尊と不和、(倭書倭人伝)
皇尊死す。男王(素戔嗚尊)立つ。
國中服す。当時、千余人を殺す。
皇尊の赤女皇尊(由心姫)年3を王となす。
素戔嗚尊、出雲國(今の近畿地方)へ下る。
*「皇子に意欲するべからず」と申し渡された素戔嗚尊は、中国山脈の山奥に下つていったのたろう。(7紀)三皇子誕生。他部。
・266
神功皇后、昔の武帝垂仁二年に薨す。(記)
昔の力が弱まった。高句麗は素戔嗚尊(平壤あたり)を併吞。
・313
高句麗は、引き續いて帝方部を亡ぼす。
*この頃、高句麗は、馬韓(百濟)・辰韓(新羅)を屬國としたのであるうか。
*この当時、馬韓から百濟へ、辰韓から新羅へと國名が変わつたようである。
・331(神紀)
倭は辛卯の年に來つて海を渡り百濟(百濟)・百濟、七枝刀を倭國に獻上。(千支連)下り(伝馬士王傳、神功皇后の三韓征討)
・(3722)
百濟、七枝刀を倭國に獻上。(千支連)下り*七枝刀に崇和四年(369)の銘有り。
・(7)
天皇素戔を獻上、阿蘇の火を三輪山に移す。
・(7)
中つ國(東の南國)を平定。朝鮮終焉。
出雲國(近畿地方)の國體。
*大國主、今の出雲に新しい出雲國をつくる。
・(7)
出雲天皇、難波に大國宮を造營。
・391
広間土王即位。
・396
広間土王、朝(みすから)水軍を率いて百濟を討ち、多くの城を獲す。(広間土王傳)
・400
高句麗が倭軍を任那加羅まで追退。(倭書倭人傳)倭軍は、帝方の地にまで侵入して高句麗と戦つたが、大敗。(倭書倭人傳)
・404
京畿道北部で、再度大敗。(倭書倭人傳)
・407

A3K-EP 刷



第2表 前300年ころを中心とする朝鮮半島の歴史と日本の歴史との対比(想像)



* 次第に明るい色の土器
へ変わってゆく。

からこ
*唐古・池上曾根等には、
扶余系殷民の子孫達が
住んでいたと思われる。
*黒いほい土器が出土する。

〔注〕 ●印は、「扶余系殷民の子孫達の遺物・遺構」と解釈してみたい。

第3表 弥生時代を中心とする時代区分

時代	区分	西暦	出来事	統治者		
				九州	中国	近畿
縄文時代	晩期			縄文人		
弥生時代	前期	前300		当初の弥生人渡来		
		前200	<ul style="list-style-type: none"> 前190頃、箕子朝鮮国奪われる。 箕子は、南韓の王となる。 前180頃、箕子は、北九州・山口地方を領有し、「海中の王」となったか。 	【箕子達による 百余国の時代】 (7~80年)		
		前100	<ul style="list-style-type: none"> 前104頃、倭人東遷開始か。 前97、崇神天皇即位 (紀) 			
	中期	B.C. A.D.		倭奴国 (極南界)		
		(イ)	<ul style="list-style-type: none"> 57、極南界の倭の奴国、後漢へ朝貢。 			
古墳時代	後期	-100	<ul style="list-style-type: none"> 107、倭の奴国、再び後漢へ朝貢。 	【倭人による 30余国の時代】 男王素(素戔鳴)を追放。 素、母の根国を建国。 (近畿に古墳出現) (銅鐸廃絶) (倭人による統一) 出雲国の国譲り [現在の出雲国へ国替え] (銅鐸廃絶)		
		-200	<ul style="list-style-type: none"> 147 } 倭国大乱 188 } 			
		-300	<ul style="list-style-type: none"> 239、卑彌呼、魏国へ朝貢。 248(?) 卑彌呼死。径百余歩の塚が作られた。 			
		-400	(銅剣・銅矛文化圏が、銅鐸文化圏を併合)			

・右頁に掲載下さい。
・『新・やまと物語』
第三巻 第3表から
転写して下さい。

(イ)、(ロ)の位置を、
図に示して下さい。

(破線)
赤い点線に引くこと。

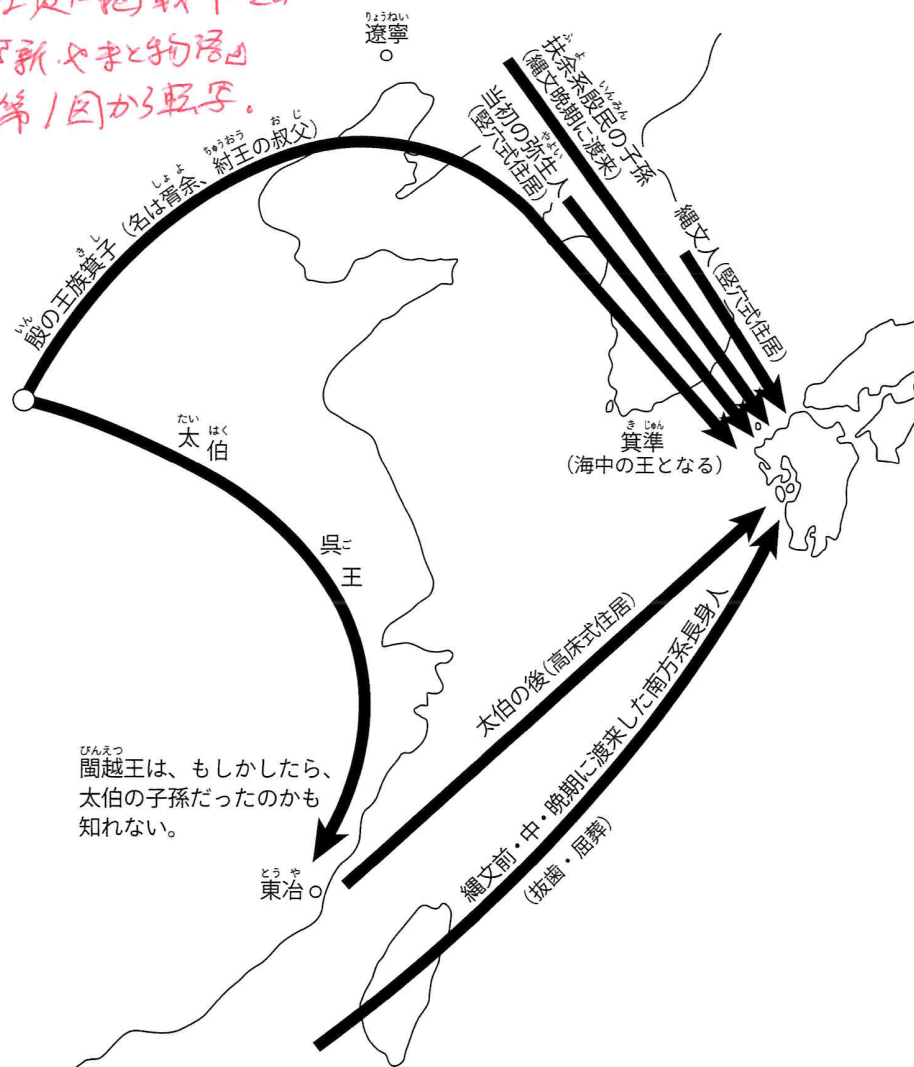
・近畿地方の高度な文化は、弥生時代末に突然衰退する。
・その後、高度な文化が急激に広がる。

・つまり、近畿地方の高度な文化と、次の古墳時代とか、スナリとはつながらない。

ひこみこ
〔男王卑弓彌呼素〕(正始8年条)

〔注〕当表の『時代』および『区分』は、佐賀県教育長、高島忠平氏の見解を基にしている。
(「吉野ヶ里」安本美典、毎日新聞社、156~7頁参照)

・左頁に掲載下し
『新・やまと物語』
第1図から転写。



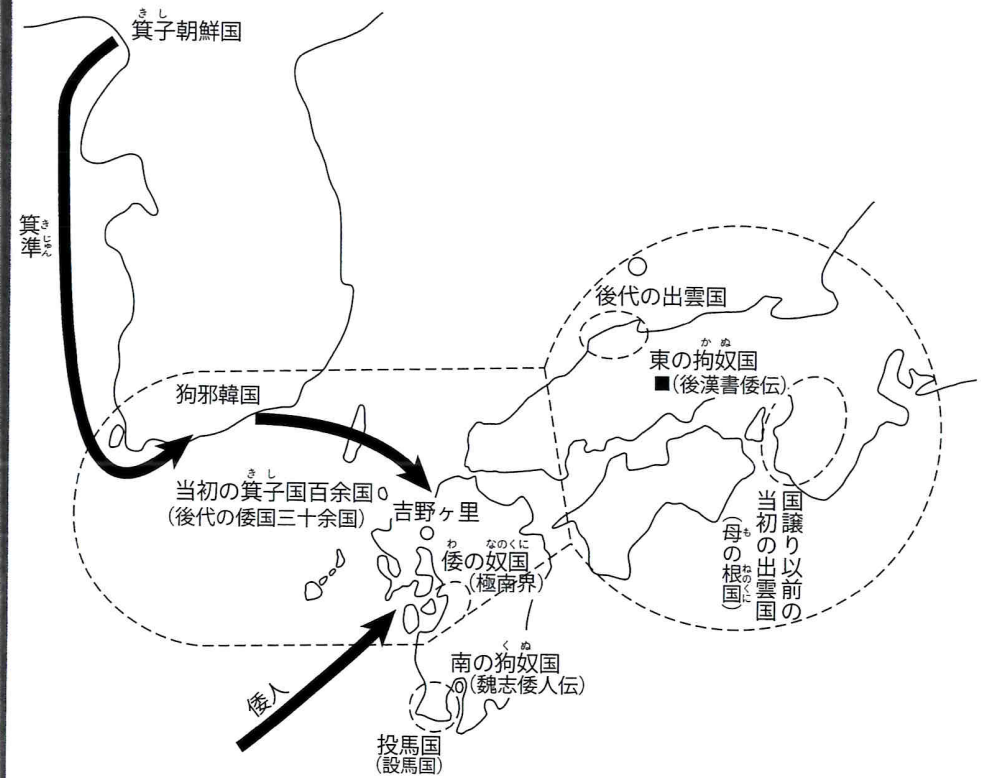
第1図 六つばかりの種族 (想像図)

第3表 弥生時代を中心とする時代区分

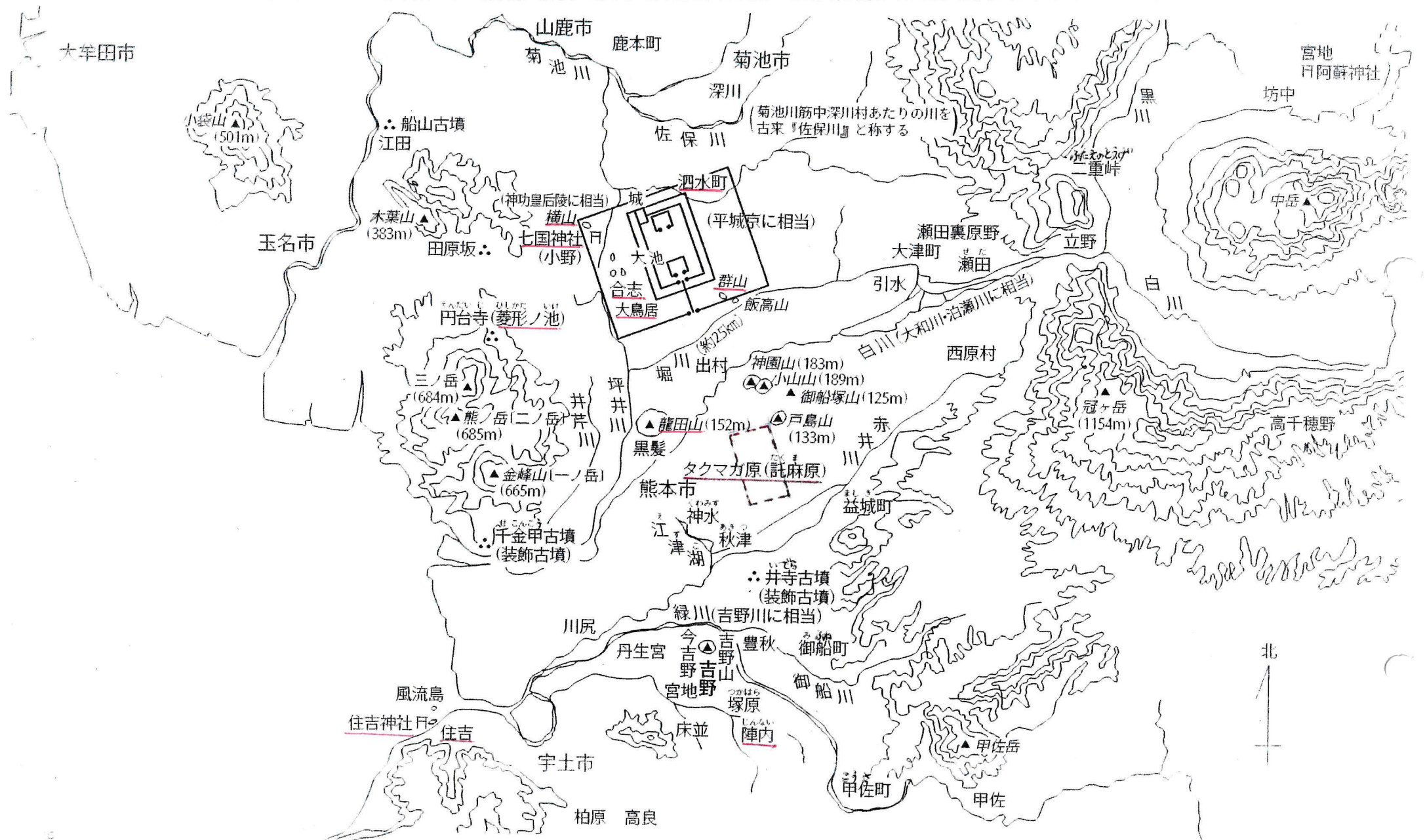
時代	区分	西暦	出来事	統治者		
				九州	中国	近畿
縄文時代	晩期			縄文人		
弥生時代	前期	前300		当初の弥生人渡来		
	前期	前200	<ul style="list-style-type: none"> 前190頃、箕子朝鮮国奪われる。箕子は、南韓の王となる。 前180頃、箕子は、北九州・山口地方を領有し、「海中の王」となったか。(『三国志』韓伝) 	【箕子達による】 百余国の時代		
	中期	前100	<ul style="list-style-type: none"> 前104頃、倭人東遷開始か。 前97、崇神天皇即位 (紀) 	倭国 (極南界)		
	後期	B.C. A.D.	<ul style="list-style-type: none"> 57、極南界の倭の奴国、後漢へ朝貢。 107、倭の奴国、再び後漢へ朝貢。 147 } 倭国大乱 188 } 239、卑彌呼、魏国へ朝貢。 248(?) 卑彌呼死。径百余歩の塚が作られた。 	【倭人による】 30余国の時代		
古墳時代		-300		当初の出雲国 (母国) (ものぐに)		
		-400	(銅剣・銅矛文化圏が、銅鐔文化圏を併合)	出雲国の国譲り (現在の出雲国へ国替え) (銅鐔廃絶)		

〔注〕当表の『時代』および『区分』は、佐賀県教育長、高島忠平氏の見解を基にしている。
〔「吉野ヶ里」安本美典、毎日新聞社、156〜7頁参照〕

- ・ 右頁に掲載
- ・ 『新・やまと物語』 第2図から転写。



第2図 東西二つの文化圏の対立 (想像図)



第12図 曹魏の洛陽城を模した「邪馬台国の都」想像図

[注]「白川中流域一帯に前方後円墳が無い」ということが注目される。

(第5巻) 12

アンダーライン(12ヶ所)と[○]を赤色に17ヶ所



第13図 邪馬台国の「洛陽城」想像図

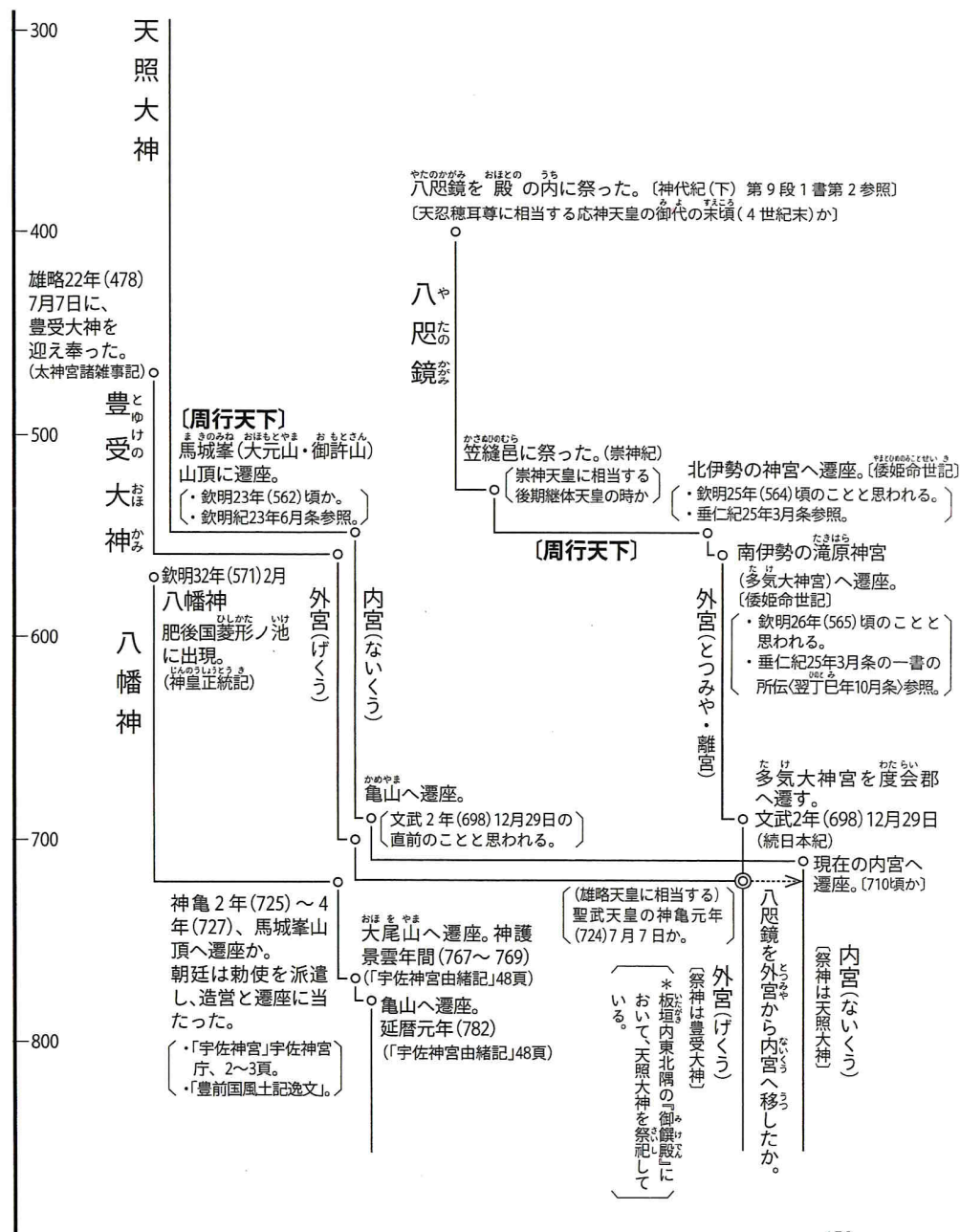
〔注〕 ①曹魏代の宮城（九六城）の城壁には、「十二の宮城門」が設けられていた。また、曹魏の明帝は、後漢代の崇徳殿の故処に「太極殿」を建てた、という。

②一方、『日本書紀』皇極天皇四年六月条には、「大極殿」や「十二の通門」の記載がある。

③合志原の『大池』『小池』について、「聖徳太子当国に《五ヶ所の池》を穿ち給ひし一なりといふ」と言い伝えられている。（「菊池郡誌」熊本県教育会菊池郡支会、名著出版、昭和48年1月発行、377頁〈大池小池〉参照）

※昭和42年6月30日付、国土地理院発行の5万分之1地図「高瀬」「隈府」参照。

第9表 内宮(天照大神の宮)・外宮(豊受大神の宮)・外宮(天照大神の離宮)・
八幡宮の変遷の歴史(想像)



13P-2/2

新・やまと物語

第 五 卷

五

目次

第1巻

第2巻

①『新・やまと物語』の題目

まえがき
序論

この物語の主張
系譜

荒筋

『日本書紀』の記載におけるかくれた約束事

新・やまと物語

第一編 神代〔先史時代〕応神朝

第一章 天地開闢

第二章 激動の黎明期

第三章 極東地域にみられる各種文化についての考察

第四章 北九州・中国・近畿地方の遺跡が語る激変の時代

第五章 東西二つの文化圏の対立(当初の弥生人と箕子の対立)

(以下、インターネット)

第3巻

第4巻

第六章 太伯の後
倭国創建(会稽の東治から東遷。箕子国内の極南界に倭奴国を建国)

第八章 垂仁天皇(五十七年、極南界の倭奴国、後漢へ朝貢)

第九章 景行天皇(二〇七年、倭奴国、後漢へ朝貢)

第十章 成務天皇(倭国大乱。倭国、北九州・山口地方に三十余国を置く)

第十一章 仲哀天皇

第十二章 神功皇后(息長足姫尊)

第十三章 三国鼎立

第十四章 洛陽の変遷の歴史

第十五章 衛氏朝鮮以後の朝鮮半島の歴史

第十六章 景初三年春

第十七章 魏国への旅立ち

第十八章 洛陽の都

第十九章 帰途

第二十章 単位

第二十一章 倭国北辺の国々

第二十二章 新王城

第5巻

第6巻

第二十三章 住吉の客人

第二十四章 倭王に拝假す

第二十五章 帰国を延しての倭国での日々

第二十六章 冬至の祭〔新嘗祭〕

第二十七章 倭国の文化

第二十八章 邪馬台国に現出した洛陽城

第二十九章 龍神の舞

第三十章 相剋

第三十一章 玉匣

第三十二章 東海の島の奇妙な習俗

第三十三章 梯儻の安否をたずねて

第三十四章 日御子の哀しみ・そして死(徑百余歩の塚の内へお隠れになる)

第三十五章 悪阻の儀式(殉葬する者、奴婢百余人)

第三十六章 千餘人もの戦死者を出した内乱

第三十七章 天石窟の儀式(年齢と地位と名前を受け継いで出生する襲名の儀式)

第三十八章 女王認知の儀式〔大嘗祭〕

第三十九章 素戔嗚の偉業

第四十章 倭国の女王田心姫

第四十一章 応神天皇(上)

第7巻

第8巻

第四十二章 朝鮮半島の歴史

第四十三章 応神天皇(中)

第四十四章 東の拘奴国壊滅(中国地方平定)

第四十五章 母国『出雲国』の国譲り(近畿地方を譲り受ける)

第四十六章 応神天皇(下)

第二編 繰り返される二朝の慣例(仁徳朝・崇峻朝)

第四十七章 第二期共立時代(大雀命・宇遲能和紀郎子)

第四十八章 仁徳天皇

第四十九章 謎の世紀『五世紀』

第五十章 裝飾古墳

第五十一章 近畿地方の古墳

第五十二章 墳輪

第五十三章 隠された二朝時代の経緯(第一期二朝時代・第二期二朝時代の経緯のあらまし)

第五十四章 平富等大公主(後の継体天皇)の出自について

第五十五章 雄略天皇(「共治国家」「共治天下」を望む遺詔)

第9巻

- 第五十六章 (天上国九州の天皇) 継体天皇
第五十七章 (日辺日本国の天皇) 清寧天皇 (白髮武
廣國押稚日本根子天皇)
第五十八章 飯豊天皇
第五十九章 顯宗天皇 (弘計天皇 (弟))
第六十章 仁賢天皇 (億計天皇 (兄))
第六十一章 武烈天皇 (仁徳系の王統最後の天皇)
第六十二章 時代の圧縮
第六十三章 第一期二朝時代の終焉
第六十四章 第二期二朝時代の幕開け
第六十五章 欽明天皇 (天國排開廣庭天皇)
第六十六章 敏達天皇
第六十七章 用明天皇
第六十八章 崇峻天皇 (朕が嫌しとおもふ所の人を断
らむ)

- 第三編 日本の歴史改編、そしてその後 (推古朝
現代)
第六十九章 第三期二朝時代 (天上国の推古天皇・日
辺日本国の等与刀弥々大王)
第七十章 推古朝の寺院・仏像

第10巻

- 第七十一章 阿蘇山
第七十二章 隋の文帝、所司をして倭国の風俗を訪わ
しむ
第七十三章 国に二の君非ず
第七十四章 皇太子廩戸豊聰耳皇子
第七十五章 金人の夢告
第七十六章 太子の苦悩
第七十七章 聖徳太子の薨去
第七十八章 蘇我馬子の死、そして推古天皇の崩御
第七十九章 舒明天皇
第八十章 皇極天皇
第八十一章 孝徳天皇
第八十二章 斉明天皇
第八十三章 高市天皇 (舒明天皇の重祚)
第八十四章 天智天皇
第八十五章 壬申乱
第八十六章 宗像神社
第八十七章 天武天皇 (上)
第八十八章 新城 (平城宮)
第八十九章 天武天皇 (下)
第九十章 持統天皇

第11巻

第12巻

第13巻

- 第九十一章 文武天皇
第九十二章 元明天皇
第九十三章 奈良時代
第九十四章 平安時代 (上)
第九十五章 小野小町
第九十六章 平安時代 (下)
第九十七章 南北朝時代 (二朝時代)
第九十八章 戦国時代
第九十九章 近世 (安土・桃山・江戸時代)
第一百章 現代及び未来
あとがき

②『新・やまと物語』第五巻の目録

新・やまと物語

- 第一編 神代 (先史時代) 応神朝
第二十一章 倭国北辺の国々
第二十二章 新王城
第二十三章 住吉の客人
第二十四章 倭王に拝假す
第二十五章 帰国を延しての倭国での日々
第二十六章 冬至の祭 (新嘗祭)
第二十七章 倭国の文化

追加資料

『千支表』

『図・表・写真図版索引』